

要 約

報告番号	① 乙 第	号	氏 名	野 上 和 香
主 論 文 題 名 Effect of Personality Traits on Sustained Remission Among Patients with Major Depression: A 12-Month Prospective Study (気質・性格がうつ病の寛解維持にもたらす影響に関する検討：うつ病外来患者における前向き研究)				
(内容の要旨) 気質・性格傾向はうつ病の発症や治療経過に影響を与えることが報告されている。Parker らが開発をしたTemperament and Personality Questionnaire (T&P) は、非メランコリー性うつ病に特徴的な気質・性格傾向を8因子に分類する質問票で、これによる気質・性格傾向分類は治療反応や治療転帰に影響するとの報告がある。うつ病の再発率は50%を超えることから、再発を防ぎながら寛解状態を維持することは、社会的機能の回復につながるため、維持期治療の重要な目標の一つである。しかしながら、T&P分類にもとづく気質・性格傾向がうつ病の寛解維持に与える影響については検討をされていない。本研究では、T&Pで分類された気質・性格傾向とうつ病患者の寛解維持 (sustained remission : SR) との関連について検討をした。 対象は、慶應義塾大学病院・群馬病院・とよさと病院の外来うつ病患者のうち、精神運動制止や興奮といった非メランコリー性うつ病の中核症状を認めない患者77例。ベースライン評価ではT&P評価および患者背景情報、17-item GRID-Hamilton Depression Rating Scale (GRID-HAMD ₁₇) を含むうつ病重症度、非機能的態度 (Dysfunctional Attitudes Scale; DAS) を含む臨床症状評価を実施し、さらに6ヶ月・12ヶ月後時点で、縦断的臨床情報の取得とうつ病重症度を評価した。6ヶ月・12ヶ月後の両評価時点で寛解状態 (GRID-HAMD ₁₇ ≤ 7) であり、この間6ヶ月以上の寛解を維持した者をsustained remission (SR) と定義した。対象の全患者をSR群、非SR群の2群に分け、関連するT&P因子を抽出した。 うつ病患者77例のうちSR群が31例、非SR群46例だった。ベースラインの臨床症状評価について2群の差を検討したところ、SR群で有意にうつ病重症度が軽く、本エピソードの期間が短かった (p=0.012, p=0.029)。6か月時点、12ヶ月時点のうつ病重症度は、両群ともにベースラインから6ヶ月の間で有意に改善した (SR群 ; p<0.01、非SR群 ; p=0.01)。ベースラインのT&P因子のスコアを両群で比較したところ、SR群において「人に内面を見せない」因子と「拒絶に敏感」因子のスコアが有意に低かった (p=0.013、p=0.007)。さらに、ベースラインで有意差のあったうつ病重症度と本エピソード期間の影響を調整するため、「人に内面を見せない」因子スコア、GRID-HAMD ₁₇ スコア、本エピソード期間を独立変数とし、SR/非SRを従属因子とした多重ロジスティック回帰分析を行ったところ、「人に内面を見せない」因子とGRID-HAMD ₁₇ が有意にSRに影響を与えることが示された (「人に内面を見せない」因子 ; p=0.043、GRID-HAMD ₁₇ ; p=0.016)。同様のモデルで「人に内面を見せない」因子を「拒絶に敏感」因子に置き換えた検定を行ったところ、影響を与える因子は検出されなかった。 本研究では、「人に内面を見せない」傾向が少ないほど寛解維持に至りやすいことが示唆された。こうした性格・気質傾向をうつ病の包括的評価に組み込むことが、より適切な維持治療の構築につながることを期待される。今後はより大きなサンプルサイズ、より長期間のフォローアップでの評価を通して、よりよい精緻な治療計画の策定を目指す。				